

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00693

研究課題名(和文) 英語破格構文の歴史的発達と談話基盤性について 構文化の時間的・空間的拡がり

研究課題名(英文) The discourse-basis of anacoluthonic constructions in the history of English:
Constructionalization across time and space

研究代表者

柴崎 礼士郎 (Shibasaki, Reijirou)

明治大学・総合数理学部・専任教授

研究者番号：50412854

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は英語破格構文の歴史的発達経緯を考察することを出発点とし、先行研究では看過されていた現象を分析してきた。破格構文の創発には談話レベルの情報連鎖が不可欠である。本研究課題では構文を談話レベルの複合現象と捉え、通時的考察により詳細な発達経緯を明らかにした。系統発生的に異なる日本語とディダ語(コートジボワール)の談話資料も精査し、近い談話機能を有する関連構文を複数の言語間で比較対照して研究を実施した。研究期間全体を通して、言語の系統発生を超えたところに潜在する人間に共通の認知的・談話機能的営みとその言語的顕在化を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語破格構文は統語的に独立して文頭や文末に生起する 경우가多く、談話/語用論標識と機能的に類似する部分がある。破格構文同士が融合して新たな破格構文を創発することからも、破格構文の談話基盤性を窺い知ることができる。個々の破格構文の歴史的考察から分かることは、破格構文にも統語的且つ談話機能的な共通部分が確認でき、広義には定型表現研究にもつながる点である。破格構文は歴史のある時点で独特な事例として創発するが、類推的に現れる関連表現とともに定型性を担うことも垣間見えてきた。近年、定型表現研究が現代語教育で注目を集めているため、破格から定型性へという歴史的側面の理解は重要であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The starting point for this research project was to examine the historical development of anacoluthonic constructions in the history of English, which have been overlooked in previous studies. Information chains in context are essential for the emergence of anacoluthons, and this research project views anacoluthons as complex phenomena at the discourse level. Further, this research adopts a cross-linguistic approach to investigate the diachronic aspects of the constructions, with emphasis on similar changes seen in phylogenetically different languages such as Japanese and Dida (Cote d'Ivoire). Throughout the entire research period, the research project has presented particular linguistic constructions that reflect some human cognitive and discourse activities common across languages.

研究分野：英語学

キーワード：談話分析 歴史言語学 構文化 文法化 語用論 談話標識 破格 定型性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、命題の前後に創発する表現群の研究が盛んであり、そうした発話者のインタラクションが顕著に現れる談話上の位置を「(発話の) 周辺部」とする用語も固まりつつある。こうした構文事例は Schmid (2000) の提唱する「貝殻名詞構文」(shell noun constructions) あるいは Hopper & Thompson (2008) が「投射構文」(projector constructions) と呼び習わす構文の一部である。

(2) 先行研究では、特に現代語における詳細な分析が多数報告されていた。一方で、報告者は既に *the fact is (that)*, *what the point is (that)* 等の周辺部表現の歴史的発達に取り組んだ経緯があったことから (Shibasaki 2014)、上掲構文の通時的発達を綿密に調査することで新たな発見に至るのではないかと判断した。これらの構文は項構造の外側に位置しており、先行情報と関連・対立する内容を導入することに特化した機能を担う破格構文と判断できる。Shibasaki (2014) が日本英語学会より「日本英語学会賞 (論文)」を受賞したことも研究を後押しした。

<引用文献>

Hopper, P. J. & Thompson, S. A. 2008. Projectability and clause combining in interaction. In R. Laury (ed.), *Cross-Linguistic Studies of Clause Combining*. John Benjamins.

Schmid, H.-J. 2000. *English Abstract Nouns as Conceptual Shells*. Mouton de Gruyter.

Shibasaki, R. 2014. On the development of *the point is* and related issues in the history of American English. *English Linguistics* 31 (1).

2. 研究の目的

本研究課題の取り組む課題は談話レベルでの構文使用実態であり、通時データに基づく構文化理論の実証研究である。つまり、構文文法から談話研究へ貢献できることは何か、あるいは、談話研究から構文文法の再考可能性を、本研究課題を通して効果的に提示できるものと判断した。つまり、「構文の談話基盤性」を通時的に解明することを本研究の目的として掲げた。構文文法の未開拓な部分は談話レベルでの分析であり、現在でもその傾向に大きな変化はないため、本研究課題を通して理論面への寄与も目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究では大規模コーパス (e.g. English-Corpora.org) を最大限に活用した。一方で、コーパスには入力ミスが散見し、歴史資料の電子化の際には、取り分け 18 世紀以前のものには句読点等が編集されている場合もある。そこで、分析精度を保つために、可能な範囲で原典資料も併用した。句読法と破格構文の関係にも注意を払うため、現代英語の会話データも分析対象とした。

(2) 英語破格構文の歴史的考察結果が、一般言語学的にどれほどの意味を持つのかを見極めるために他言語との比較研究も実施した。具体的には、研究に取り組んだ経験のある日本語とディダ語 (コートジボワール) での特徴的な構文を考察した。日本語については、国立国語研究所が管理運営するコーパスの利用許可を得て研究に取り組んだ。同時に、語法文法書・辞書を精査して、時代毎の日本語の使用実態へも注意を払った。ディダ語については、2002 年から 2003 年にかけて記述調査をした際に、談話資料の録音と書き起こしも済ませてある。当時の資料を精査して、特徴的な談話機能を果たす構文を分析対象とした。英語破格構文の歴史的考察結果を、対照言語学的成果へと広げる可能性を追求した。

(3) 理論的には、英語破格構文の歴史的考察を通して構文化および文法化の理論的妥当性を検証することを狙いとした。研究開始当初は、複雑な談話現象を説明するには構文化の枠組みが有効であると期待したが、文法化の研究成果も参照しつつ実際のデータと突き合わせる姿勢を貫いた。

4. 研究成果

(1) 研究開始当初 (2019-2020 年度) は、1) 文末で非標準的に使用される「*is all* 構文」(Shibasaki 2020)、2) 文末使用の「*, period/full stop* の語用論標識化」(柴崎 2019)、および、3) 文頭表現として用いられる「*the fact remains is* 構文」(Shibasaki 2019) の歴史的経緯を分析した。破格構文は使用頻度が低いこともあり、その創発時期を特定することが難しい場合もあるため、アメリカ英語とイギリス英語を比較しつつ分析を進めた。時期的には、新型コロナウイルスの世界的流行と重なったこともあり、中止あるいは延期となった学会も少なくなかった。また、論文刊行時期が大

幅に遅れる場合もあった。しかし、以下に研究成果を一部提示してあるように、全体として十分な成果を報告できたと判断している。

<引用文献>

- Shibasaki, R. 2019. *The fact remains is that* spontaneity and sequentiality account for the amalgamation. Paper presented at the 16th International Pragmatics Conference (IPrA16), The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong.
- 柴崎礼士郎 2019. 「句読法から語用論標識へ —Period の談話機能の発達と今後のアメリカ英語について—」西村義樹・鈴木亨・住吉誠 (編) 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』開拓社。
- Shibasaki, R. 2020. From parataxis to amalgamation: The emergence of the sentence-final *is* all construction in the history of American English. In K. Bech & R. Möhlig-Falke (eds.), *Grammar - Discourse - Context: Grammar and usage in language variation and change*. Berlin: De Gruyter Mouton.

(2) 当初の研究計画では3年目(2021年度)が研究完成年度であった。しかし、新型コロナウイルスの猛威に衰えがなかった時期でもあり、結果的に、この後2年の延長を決断することになった。とりわけ国際学会の中止や延期があった時期でもあり、その間に、英語以外の言語研究者から共同研究への打診が相次いだ。英語破格構文研究を進めながら(柴崎2021)、日本語を中心とする東アジア言語における破格構文の研究への道が開けた時期でもあった。さらに、日本語が英語とどのように接触し、どのような変化を引き起こしたのかという点に研究領域が拡がり、研究実績の一部にもそうした成果が反映されている(Rhee et al. 2021; Shibasaki 2021)。

<引用文献>

- 柴崎礼士郎 2021. 「第4章: 構文拡張と主観化の解釈について—英語史における *the/my/Ø* question *is* の考察に基づいて」天野みどり・早瀬尚子 (編) 『構文と主観性』くろしお出版。
- Rhee, S., R. Shibasaki & X. Chen (eds.) 2021. Grammaticalisation of discourse markers in East Asian languages. Special issue of *East Asian Pragmatics* 6 (3).
- Shibasaki, R. 2021. Reanalysis and the emergence of adverbial connectors in the history of Japanese. In A. Haselow & S. Hancil (eds.), *Studies at the Grammar-Discourse Interface*. Amsterdam: John Benjamins.

(3) 2年の延長許可を得て(2022-2023年度)、英語破格構文の研究を深めることができただけでなく(Shibasaki forthcoming b)、さらに多くの研究者との交流も深めることが可能となった。英語研究に関しては、歴史のある時点で破格構文として創発した事例が、類推によって派生した関連諸構文と定型性を担うようになる過程を理解するに至った。換言すると、個々の事例として創発した破格構文は、歴史的に使用し続けられた場合、最終的には関連諸構文とともに定型表現化する可能性が高いことが分かった。研究成果の一部は論文集として刊行した(渡辺・柴崎2023)。

歴史言語学と談話研究の融合を目指して研究成果を報告してきたことにより、日本言語学会から招待論文執筆の依頼を受けた。これまでになく文法と談話研究の可能性を論じるべく、過去に記述調査にあたったディダ語の談話資料を活用して、破格構文と定型表現研究の蓄積を最大限に活かした論文を上梓した(Shibasaki forthcoming a)。さらに、英語との言語接触を経て生まれた日本語の刷新表現の研究も行い刊行に至っている(Shibasaki 2023)。

5年の研究期間を経て分かったことは、破格構文と定型性を切り離して研究する理由はないという点である。破格と定型性は意味的に矛盾するため、現代語研究の多くで別々に扱われている。しかし、破格から定型性へという言語変化は、歴史的考察と対照言語学的研究手法を用いて初めて理解できるということである。定型表現研究が現代語教育で注目を集めているため、研究だけではなく教育面への波及も視野に入れつつ、研究を継続していきたい。

<引用文献>

- 渡辺拓人・柴崎礼士郎 (編著) 2023. 『英語史における定型表現と定型性』開拓社。
- Shibasaki, R. 2023. From comparative standard marker to comparative adverb. In S. Hancil & V. Tantucci (eds.), *Different Slants on Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins.
- Shibasaki, R. forthcoming a. On the discourse functions of *ni* in Abou Dida (invited paper). *Gengo Kenkyu* (『言語研究』) 166.
- Shibasaki, R. forthcoming b. A little more thought to the decline of *iwis*: Analogy, reanalysis and obsolescence. In O. Imahayashi, M. Ogura & Y. Nakao (eds.), *Linguistic and Stylistic Approaches to Speech, Thought and Writing in English*. Bern: Peter Lang.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計32件（うち査読付論文 19件 / うち国際共著 5件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Reijirou Shibasaki	4. 巻 NA
2. 論文標題 "A little more thought to the decline of iwis: Analogy, reanalysis and obsoletism"	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 Linguistic and stylistic approaches to speech, thought and writing in English: Diachronic and synchronic (eds. by Osamu Imahayashi, Michiko Ogura and Yoshiyuki Nakao, Peter Lang)	6. 最初と最後の頁 TBA
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Reijirou Shibasaki	4. 巻 166
2. 論文標題 "On the discourse functions of nl; in Abou Dida: Expanding the research horizons of cognitive linguistics"	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Gengo Kenkyu	6. 最初と最後の頁 TBA
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Reijirou Shibasaki	4. 巻 30
2. 論文標題 "Some issues on contact-induced grammaticalization: The case of ya-ina-ya in Modern through Present Day Japanese"	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 319-333
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 NA
2. 論文標題 「言語接触と文法化について-近現代日本語の「より」構文を事例として」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本語と近隣言語における文法化』（ナロック ハイコ・青木博史（編）ひつじ書房）	6. 最初と最後の頁 157-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki Reijirou	4. 巻 NA
2. 論文標題 Chapter 1. From comparative standard marker to comparative adverb	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Different slants on grammaticalization (eds. by Sylvie Hancil and Vittorio Tantucci, John Benjamins)	6. 最初と最後の頁 20-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/slcs.232.01shi	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 10
2. 論文標題 「語用論標識 but the fact is that の定型化 - 後期近代英語と現代英語を中心に」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『英語史における定型表現と定型性』（渡辺拓人・柴崎礼士郎（編）開拓社）	6. 最初と最後の頁 145-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 10
2. 論文標題 「定型表現研究と英語史」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『英語史における定型表現と定型性』（渡辺拓人・柴崎礼士郎（編）開拓社）	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki Reijirou	4. 巻 39
2. 論文標題 Formulaicity and formulaic expressions in Japanese: an introduction	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 5-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2023-2003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki Reijirou	4. 巻 39
2. 論文標題 Guest Editor 's notes	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2023-2002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 38
2. 論文標題 書評 - Nevalainen, Terttu, Minna Palander-Collin and Tanja Saily (eds.) Patterns of Change in 18th-Century English: A Sociolinguistic Approach, Amsterdam: John Benjamins, 2018, xi + 311	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代英語研究	6. 最初と最後の頁 71-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 REIJIROU SHIBASAKI	4. 巻 NA
2. 論文標題 "Reanalysis and the emergence of adverbial connectors in the history of Japanese"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studies at the Grammar-Discourse Interface: Discourse markers and discourse-related grammatical phenomena (eds. by Alexander Haselow and Sylvie Hancil, John Benjamins)	6. 最初と最後の頁 102-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/slcs.219.04shi	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 NA
2. 論文標題 「第4章：構文拡張と主観化の解釈について 英語史における the/my/zero question is の考察に基づいて」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『構文と主観性』（天野みどり・早瀬尚子（編），くろしお出版）	6. 最初と最後の頁 75-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SEONGHA RHEE, REIJIROU SHIBASAKI, XINREN CHEN	4. 巻 6 (3)
2. 論文標題 "Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages: Introduction"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 East Asian Pragmatics Vol. 6 No. 3 (2021): Special Issue: Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages (Equinox)	6. 最初と最後の頁 271-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/eap.21135	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 REIJIROU SHIBASAKI	4. 巻 6 (3)
2. 論文標題 "Discourse markers in the making: Pragmatic differentiation of jijitsujo from jijitsu in Modern through Present Day Japanese"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 East Asian Pragmatics Vol. 6 No. 3 (2021): Special Issue: Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages (Equinox)	6. 最初と最後の頁 303-329
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/eap.20921	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Reijirou Shibasaki	4. 巻 26
2. 論文標題 "From a clause combining conjunction to a sentence initial adverbial connector in the history of Japanese: With special attention to totan(ni) at that moment"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics 26 (eds. by Shoichi Iwasaki, Susan Strauss and and Shin Fukuda, Stanford: CSLI Publications)	6. 最初と最後の頁 347-358
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 なし
2. 論文標題 「(It/there is) no nay の歴史的推移と文法化の漸次性について」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『中世英語英文学研究の多様性とその展望 吉野利弘先生 山内一芳先生 喜寿記念論文集』(菊池清明・岡本広毅 編)	6. 最初と最後の頁 459-472
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 なし
2. 論文標題 「Wh分裂文と進行形の歴史的発達と融合について 情報連鎖の再構築と対人関係機能」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点 用法基盤モデルに基づく新展開』(中山俊秀・大谷直輝 編 ひつじ書房)	6. 最初と最後の頁 239-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東泉裕子・高橋圭子	4. 巻 12
2. 論文標題 「現代日本語における「もちろん」のヘッジ用法」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 26_34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭子・東泉裕子	4. 巻 12
2. 論文標題 「「視聴解」を中心とした聴解授業の試み - 教養としてのアカデミック・ジャパニーズ教育を目指して -」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 54_62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭子・東泉裕子	4. 巻 なし
2. 論文標題 「コーパスに見る漢語「無理」の歴史」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『言語資源活用ワークショップ2020発表論文集』	6. 最初と最後の頁 196_208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭子・東泉裕子	4. 巻 23
2. 論文標題 「語用論的標識としての漢語「無理」の歴史」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『東洋大学人間科学総合研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 53_74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭子・東泉裕子	4. 巻 15
2. 論文標題 「大学生の依頼メールにおける配慮表現」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『コミュニケーション文化』	6. 最初と最後の頁 83_91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki, Reijirou	4. 巻 NA
2. 論文標題 "From Parataxis to Amalgamation: The emergence of the sentence-final is all construction in the history of American English"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Kristin Bech and Ruth Möhlig-Falke (eds.), Grammar - Discourse - Context: Grammar and usage in language variation and change (De Gruyter Mouton)	6. 最初と最後の頁 171-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/9783110682564	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 2
2. 論文標題 「アメリカ英語における年代表記の変遷について イギリス英語と比較して」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小川芳樹(編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2』(開拓社)	6. 最初と最後の頁 113-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 1
2. 論文標題 「第7章 句読法の歴史的変化に見る動的語用論の可能性 - イギリス英語のfull stopを中心に - 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築へ向けて1』（開拓社）	6. 最初と最後の頁 144-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 1
2. 論文標題 「第4章 句読法から語用論標識へ Periodの談話機能の発達と今後のアメリカ英語について 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 住吉誠・鈴木亨・西村義樹（編）『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿（開拓社）	6. 最初と最後の頁 54-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 NA
2. 論文標題 「監訳者解説（Bybee 2015）」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小川芳樹・柴崎礼士郎（監訳）『言語はどのように変化するのか』（Joan Bybee, Language change, Cambridge, Cambridge UP, 2015)	6. 最初と最後の頁 400-415
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭子・東泉裕子	4. 巻 11
2. 論文標題 「配慮を理解していただくことは可能ですか - 新しい依頼表現と世代差 - 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 37 - 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭子・東泉裕子	4. 巻 4
2. 論文標題 「勿論考」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『言語資源活用ワークショップ2019発表論文集』（国立国語研究所）	6. 最初と最後の頁 128 - 138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00002561	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭子・東泉裕子	4. 巻 22
2. 論文標題 「語用論的標識としての「勿論」の歴史」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『東洋大学人間科学総合研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 197 - 208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭子・東泉裕子	4. 巻 13
2. 論文標題 「ヘッジとしての「もちろん」の歴史」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『コミュニケーション文化』（跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科）	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Higashiizumi, Yuko, and Takahashi, Keiko	4. 巻 20
2. 論文標題 "The development and use of mochiron as a pragmatic marker in Japanese"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Papers from the Twentieth National Conference of the Japanese Cognitive Linguistics Association	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計28件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 20件）

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「漢語複合語「事実上」と「事実」の談話標識化と談話構造」
3. 学会等名 「域外漢語借詞研究專題講座」（中山大学、中国広州）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Reijirou Shibasaki
2. 発表標題 "Discourse sequence and the rise of the evidential marker to in Japanese"
3. 学会等名 International Workshop: Discourse grammar and complementation (Sun Yat-sen University, Guangzhou, China)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Higashiizumi Yuko and Reijirou Shibasaki
2. 発表標題 "From truth to truly: The case of shin-ni 真/真に 'truly' in Japanese"
3. 学会等名 International Pragmatics Association 18 (IPrA18, Brussels)（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Reijirou Shibasaki and Keiko Takahashi
2. 発表標題 "From a unit of time in temporal axis to a discourse marker in a contextual-spatial axis: The case of shunkan 瞬間 ' (at the) moment ' "
3. 学会等名 International Pragmatics Association 18 (IPrA18, Brussels)（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Reijirou Shibasaki
2. 発表標題 "On the decline of iwis, i-wis and I wis"
3. 学会等名 The 22nd International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL22, Sheffield) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「三つ子の談話標識 (DM) について - 談話機能は遺伝か環境か - 」
3. 学会等名 「第2回語用論グランプリ」(日本語用論学会)(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Reijirou SHIBASAKI
2. 発表標題 "Diachronic aspects of what matters is in American English and issues concerning grammaticalization"
3. 学会等名 2022 Seoul International Conference on Linguistics (SICOL-2022, Korea, Aug. 11-12, 2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Reijirou SHIBASAKI
2. 発表標題 "Thoughts race through my mind: Discourse-pragmatic markers in Japanese from the perspective of East Asian languages and beyond" (Plenary talk)
3. 学会等名 Workshop: Discourse Grammar and Formation of Discourse Markers (Sun Yat-sen University, China, Oct. 8, 2022) (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Jerzy N. NYKIEL and Reijirou SHIBASAKI
2. 発表標題 "On the rise and fall of (it/there) is no nay in the history of English"
3. 学会等名 The Colloque Bisannuel de la Diachronie de l' Anglais 7 (CBDA-7, Paris, Jan. 13, 20 and 27, 2023) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Reijirou SHIBASAKI
2. 発表標題 "(De)grammaticalization in Japanese through language contact with European languages" (Plenary talk)
3. 学会等名 Linguistics and Data Science in Collaboration (DaSci) 2022 (University of Tsukuba, Japan, Jan. 26, 2023) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Reijirou SHIBASAKI
2. 発表標題 "On the role of writing systems in the process of grammaticalization"
3. 学会等名 The 30th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK30, Simon Fraser Univ., Vancouver, March 11-13, 2023) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 REIJIROU SHIBASAKI
2. 発表標題 "On the development of the projector the chances are that in American English: A constructional approach"
3. 学会等名 The International Society for the Linguistics of English 6 (ISLE6 online, Theme: Evolving English and the Digital Era) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 REIJIROU SHIBASAKI
2. 発表標題 "Thoughts on formulaic expressions in English in a cross-linguistic perspective"
3. 学会等名 Norwegian Graduate Researcher School in Linguistics and Philology (online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「適者生存? 二重最上級 bestest と worstest から考察する近現代英語」
3. 学会等名 「近代英語協会第 38 回大会Zoom コンファレンス・シンポジウム「周辺表現はどのように英語標準化時代を生き抜いたのか 3つの事例から考える」」(司会兼発表)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 SHIBASAKI, Reijirou
2. 発表標題 "Pronominal vs. nominal forms of direct object in Late Modern through Present Day English"
3. 学会等名 Symposium: More thoughts on (in)transitivity and related issues in the history of English (Chairperson & Presenter), The 92nd Annual Conference of English Literary Society of Japan Web Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 SHIBASAKI, Reijirou
2. 発表標題 "Some notes on the emergence of full stop as a pragmatic marker in the history of British English"
3. 学会等名 2020 International Conference on English Linguistics (Kyung Hee University, Seoul [online]), org by The Korean Association for the Study of English Language and Linguistics (KASELL) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「「たしかに」の談話機能と定型性について」
3. 学会等名 「話しことばの言語学ワークショップ」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋圭子・東泉裕子
2. 発表標題 コーパスに見る漢語「無理」の歴史
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 東泉裕子・高橋圭子
2. 発表標題 現代日本語における反応表現としての漢語「無理」
3. 学会等名 第11回日本語実用言語学国際会議(ICPLJ11) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「「統語変化と主観化の解釈について - 英語史における the/my/&0slash; question is の考察に基づいて - 」」
3. 学会等名 「2019年度 構文研究会」(大妻女子大学; 主催者 天野みどり(大妻女子大学), 早瀬尚子(大阪大学), 2019年12月21日)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 "Another look at formulaicity: The case of the bottom line is (that) in British and American English"
3. 学会等名 Workshop on Formulaicity and Referentiality in Discourse (Tokyo University of Foreign Studies, Dec 8, 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「言語接触と文法化について 近現代語の比較構文を事例として」
3. 学会等名 「第4会日本語と近隣言語における文法化」(東北大学文学研究科; 主催者 ナロック・ハイコ(東北大学), 2019年11月30日)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 "The question remains is whether constructions are in the making: Constructionalization in Present-day American English"
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-15, Kwansai Gakuin University, Nishinomiya, Japan, Aug 6, 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 "The fact remains is that spontaneity and sequentiality account for the amalgamation"
3. 学会等名 Workshop (Conveners: Y. Higashiizumi, N. O.Onodera, and R.Shibasaki), The 16th International Pragmatics Conference (IPrA-16, The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong., June 11, 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 "From punctuation to pragmatic marker, period: Written language as a source of language change"
3. 学会等名 Dictionary Society of North America 22 / Studies in the History of the English Language 11 (Indiana University, Bloomington, May 10, 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Higashiizumi, Yuko
2. 発表標題 "Emergence of the pragmatic marker shojiki 'honestly (speaking)'"
3. 学会等名 Workshop (Conveners: Y. Higashiizumi, N. O.Onodera, and R.Shibasaki), The 16th International Pragmatics Conference (IPrA-16, The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong., June 11, 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Higashiizumi, Yuko, and Takahashi, Keiko
2. 発表標題 "The development and use of mochiron as a pragmatic marker in Japanese"
3. 学会等名 Workshop: The emergence of pragmatic markers from Chinese nominal compounds in Chinese, Japanese and Korean (Conveners: Yuko Higashiizumi and Seongha Rhee, Aug 5, 2019), 日本認知言語学会第20回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋圭子・東泉裕子
2. 発表標題 「勿論考」(ポスター発表)
3. 学会等名 「言語資源活用ワークショップ2019」(国立国語研究所, 2019年9月2日)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計17件

1. 著者名 Osamu Imahayashi, Michiko Ogura and Yoshiyuki Nakao (eds.)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 540
3. 書名 Linguistic and Stylistic Approaches to Speech, Thought and Writing in English	

1. 著者名 Sara Williamson, Adeola Aminat Babayode-Lawal, Laurens Bosman, Nicole Chan, Sylvia Cho, Ivan Fong, Kaye Holubowsky (eds.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 CSLI Publications	5. 総ページ数 692
3. 書名 Japanese/Korean Linguistics 30	

1. 著者名 ナロック ハイコ・青木博史(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 『日本語と近隣言語における文法化』	

1. 著者名 Sylvie Hancil and Vittorio Tantucci (eds.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 284
3. 書名 Different slants on grammaticalization	

1. 著者名 渡辺拓人・柴崎礼士郎（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 212
3. 書名 『英語史における定型表現と定型性』	

1. 著者名 Alexander Haselow and Sylvie Hancil (editors)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 354
3. 書名 Studies at the Grammar-Discourse Interface: Discourse markers and discourse-related grammatical phenomena	

1. 著者名 天野みどり・早瀬尚子（第1章），小柳智一（第2章），小野寺典子（第3章），柴崎礼士郎（第4章），大橋浩（第5章），渡邊淳也（第6章），早瀬尚子（第7章），本多啓（第8章），益岡隆志（第9章），青木博史（第10章），井本亮（第11章），天野みどり（第12章），三宅知宏（第13章）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 『構文と主観性』	

1. 著者名 Seongha Rhee, Reijirou Shibasaki, Xinren Chen (Introduction), Xiao He, Reijirou Shibasaki, Seongha Rhee, Yuko Higashiizumi, Keiko Takahashi, Sujin Eom, Seongha Rhee, Hyun Sook Lee	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Equinox	5. 総ページ数 151
3. 書名 East Asian Pragmatics Vol. 6 No. 3 (2021): Special Issue: Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages	

1. 著者名 菊池清明・岡本広毅(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 650
3. 書名 『中世英語英文学研究の多様性とその展望 吉野利弘先生 山内一芳先生 喜寿記念論文集』	

1. 著者名 Shoichi Iwasaki, Susan Straussand and Shin Fukuda	4. 発行年 2020年
2. 出版社 CSLI Publications	5. 総ページ数 435
3. 書名 Japanese/Korean Linguistics 26	

1. 著者名 中山俊秀・大谷直輝(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 408
3. 書名 『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点 用法基盤モデルに基づく新展開』	

1. 著者名 ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー(著) 椎名美智(監訳)加藤重広、滝浦真人、東泉裕子(訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 406
3. 書名 新しい語用論の世界：英語からのアプローチ	

1. 著者名 Kristin Bech and Ruth Møhlhlig-Falke (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 375
3. 書名 Grammar - Discourse - Context: Grammar and usage in language variation and change	

1. 著者名 小川芳樹（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 440
3. 書名 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2』	

1. 著者名 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 272
3. 書名 『動的語用論の構築へ向けて 第1巻』	

1. 著者名 住吉誠・鈴木亨・西村義樹（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 264
3. 書名 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』	

1. 著者名 小川芳樹・柴崎礼士郎（監訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 464
3. 書名 『言語はどのように変化するのか』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>教員データベース https://gyoseki1.mind.meiji.ac.jp/mjuhp/KgApp?resId=S001500 researchmap https://researchmap.jp/read0127710/published_papers?limit=20 ResearchGate https://www.researchgate.net/profile/Reijiro-Shibasaki 明治大学教員データベース https://gyoseki1.mind.meiji.ac.jp/mjuhp/KgApp?kyoinId=ymdygeyoggy</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Panel: Sequentiality and Emergence of Discourse-Pragmatic Markers (Organizer & Presenter), The 16th International Pragmatics Conference, Hong Kong	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際語用論学会2023パネル発表	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Symposium: More thoughts on (in)transitivity and related issues in the history of English (Chairperson & Presenter), The 92nd Annual Conference of English Literary Society of Japan Web Conference	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

カナダ	University of British Columbia			
ノルウェー	University of Bergen			
中国	Sun Yat-sen University			